
僕と探偵と呻き声

遊喩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と探偵と呻き声

【Nコード】

N7400B

【作者名】

遊喩

【あらすじ】

『隣の部屋から不気味な声が聞こえてくるんです――』とある古アパートで起きた失踪事件。そして毎週土曜日に聞こえる呻き声。嫌がらせなのか怨念なのか、確かめるべく少年が訪れたのは、小さな診療所だった。医者兼探偵、折原暦シリーズ第一弾。

始

——話は七年前に遡ります。

当時私は、あの人——弘明さんと、古いアパートで暮らしておりました。

あの人は大学生、私も大学に入ったばかりでしたから、二人ともお金はありませんでした。

それでも——幸せに暮らしていました。

弘明さんは、真面目な人でした。浮気とかそんなことで疑ったこともありません。

本当に真面目で、優しい人でした。

けれど——いなくなってしまったので御座います。

——いいえ、その日もいつもと変わらない様子でした。ただ、用事があって帰りは少し遅くなると言っていました。でも本当に変わったところはなくて、いつもと同じように笑顔で出て行ったのです。

それっきり、帰ってきませんでした。

先程も言った通り、弘明さんを疑ったことなんてありません。だ

から、その日も行き先も聞かずに送り出したのです。

今考えれば――聞いておけばよかったと、後悔するばかりなのですが。

それでも、二日待ちました。事故にでも遭ったのなら報せがあるだろうし、本当にあの人を――馬鹿みたいに信用していたので、絶対帰ってくると思っていました。

けれど、あの人が丸一日帰ってこないことなんてそれまで一度もなかったので、嫌な予感はしていたのです。

三日目に、警察に電話しました。流石におかしいでしょう。だから、捜して貰ったんです。

でも――彼は何処にもいませんでした。

彼の行きそうなところも全部探したけれど、何処にもいなかったのです。

それで――気づけば七年が経っていました。

今回こちらに来たのは、その――

――実は来月で、ちょうど七年目なのです。

あと一ヶ月で、彼は《無条件で死んでしまう》のです。

いえ――この場合は、《私が殺す》ことになってしまうのでしょ

うか。

でも、そうするしかないのです。このまま待っていても——きつと帰って来てはくれないでしょう。

ですからせめて、残り一ヶ月の間捜してみようかと思ひまして。

それで、こちらにご相談にあがったので御座います。

無事に暮らしているなら暮らしているで《殺さずに済む》し——
《既に死んでいる》のだとしても、

遺体のない葬式なんて、嫌ですから。

零

ガラン、と喫茶店に入った時のような音が響いた。

「失礼しまーす……」

何故か二つあるドアの右側を開けて、僕は呟いた。

僕が今現在突っ立っているのは、『折原クリニック』という小さな診療所の玄関である。玄関というよりは入口だろうか。要するに入ってすぐのところである。正確に言うとな半身だけドアの隙間から突っ込んだ状態だ。

僕は診療所どころか病院にも滅多に行かない比較的健康な人間なので、此処に来るのは初めてである。今回だって別に怪我をしたわけでも病気になるわけでもない。

僕が此処に来たのは、此処の——というか此処の医者——《副業》のことを風の噂で聞いたからである。

基本的に僕は、病院とかそういう場所は嫌いである。場所というか、雰囲気はどうしても好きになれない。

この診療所だって、外見は新しいし真っ白な壁で清潔な感じがするが、それと同時に病院独特の不安な感じもしていて、僕の好きな雰囲気醸し出している。従ってこの中に入ることは非常に不本意である。

けれど、入らないわけにはいかない。僕は此処以外に頼れる場所を見つけられなかったのだから。それで仕方なく、恐る恐る、何故か二つもあるドアの右側を開けたというわけだ。

僕は体全部を中に入れて、ドアを閉めた。

一瞬で空気が変わったような気がした。

静かだ。微かに換気扇の回る音がする程度である。

とりあえず部屋を見渡す。

受付らしいものはどこにも見あたらない。僕は診察してもらいに来たわけではないのだけれど、僕の《要件》は誰に伝えれば良いの

かわからない。そもそも、受付がないってどうなんだろう。診療所にはないものなんだろうか。

中央にはよく病院で見かけるような白い長いすが四つ、正方形をつくるように、それぞれ向かい合わせで並べられている。そしてその真ん中にガラスのテーブルがあり、申しわけ程度の花瓶に小さな花が生けられていた。

入口の正面には、奥に続いているであろうドアがある。これまた白いドアでわかりにくい。開く気配も一向にない。

……受付がないのは、まあ良いとして。

看護師も患者もいないというのは、どうなんだろう。

どうやらこの真っ白な世界に存在する生物は、僕と小さな花だけのようである。

——いや、違う。前言撤回する。

まだ何か《いる》。

《いる》けれど——《見えない》のだ。

ここは——

僕はとてつもない不安に襲われた。

ああ、困った。非常に困った——

ここは、《僕の部屋と同じ》なのだ。

《アレ》がいるのだ。

矛盾した違和感が空気を支配していく。

僕はもの凄く気持ち悪くなった。

正面を凝視したまま、手を後ろにやる。

ひやりとした金属。

ドアの取っ手だ。

僕は力の入らぬ手でそれを掴んだ。金属らしい冷たさは、僕の汗でじとっとしたものに変わっていく。

目の前が真っ白だ。

怖い。いや、怖いというより――

やはり、気持ち悪い。

真っ白の中に、一つだけ――赤い点が、ある。

花だ。小さな花。僕以外の生物。

キィ、とドアが音を立てた。

隙間風が入る。

僕が外に出ようと後ずさったちようどその時、

僕でも花でもない何かが――

声を発した。

「何がしたいんだ」

男の声だった。

けれど、《アレ》の声ではなかった。

僕が返答しなかったからか――というか僕に問いかけているのかはわからないが――男の声は少し不機嫌になった、ような気がした。

「何がしたいのかと聞いている」

「はぁ、え？あの・・・・・・えっとなに、が、でしょう？」

「だから」

突如手前長椅子から頭が生えた。

僕はびっくりして、うわぁと後ろに下がった。ドアに頭をぶつけた。

その様子を見て、頭は眉を顰めた。

「入って来たにも拘らずもう一度外に出ようとしただろう。間違えたのか冷やかしのなか、貴様は何がしたいのかと聞いているのだ。別に驚くことでもあるまい」

頭——じゃなくて、どうやら手前の長椅子に横たわっていたらしい男は、そう言って僕をじっと見つめた。

凄く整った顔である。髪は茶色、目も黒くはない。染めているわけでもカラーコンタクトをはめているわけでもなさそうだ。外人なのだろうか。それにしては流暢で、おまけに何となく古風な日本語である。

僕は違和感の正体に安心しながら、それでも恐る恐る弁解した。

「あの——ですね、誰もいないのかと思ひまして——」

僕がそう言うと言は上半身を起こした。

「別に診察してもらうのなら誰もいなかろうが関係ないだろう。

——ああ、営業しているのかどうか、怪しく思ったのだな？ 安心しろ、ここはちゃんとやっている。看護師はいないが、医者ならヤブ医者がちゃんというぞ」

「いや、僕は診察してもらいに来たんじゃ——え、ヤブ、なんですか？」

僕がそう尋ねると男はいや、と無表情で答えた。

「別に腕は普通だろう。普通どころか、その辺の医者なんぞよりはよっぽど役に立つ。だがまあ、俺はそいつが心の底から気に食わないのだな」

あんな奴はヤブでいいのだ、と男は笑った。

笑うと更に格好良い。美青年である。古風な喋り方が全く似合わない。

「ところで、どこが悪いのだ」

「へ？」

突然の問いに、僕は非常に間拔けな声を出してしまった。

再び男は眉を顰める。どうやら癖らしい。

「間違いでも冷やかしてもないのだろうか？ どこが悪いのだ」

「いや、あのですね？」

どうやら僕は診療所の患者だと決め付けられてしまったようである。

勿論僕は入る所を間違えたわけではないし、冷やかしのつもりもない。

だが、診察してもらいに來たわけでもない。

僕は《依頼》をしに來たのだ。

「僕は診察してもらいに來たのではなくて、」

「何だ、やはり冷やかしのかなのか。それともアレか、復讐か。あの馬鹿医者に恨みでもあるのか。それなら俺は全面的に協力するが」

男は楽しそうに言った。

「いや、そうじゃないんですけど」

「だったら何だというのだ」

再び男の声が不機嫌になってくる。

「えっと、実は、その、風の噂なんですけど――」

「何だ」

もの凄く不機嫌そうである。

「――こちらが、その、探偵事務所だと聞きました」

「――何？」

「ですから風の噂なんですけれど。で、僕は、あの、依頼したいことがありまして――」

僕はしどろもどろになりながらも、漸く用件を伝えることに成功した。

ただ、ここが本当に診療所兼探偵事務所なのかはわからない。

何しろ、風の噂なのだから。

情報源はクラスメイトの兄である。何でも此処の医者とは高校時代の同級生で、探偵事務所をやっているという話を聞いたことがあるらしい。かなり曖昧な情報である。

それでも僕はその噂にかけた。それ程大変な状況だったのだ。

僕の用件を聞いた男は、溜め息をついた。眉は顰めたままである。

「貴様、右のドアから入って來ただろう」

探偵事務所は左のドアだ――男は長椅子に座りながら言った。

どうやら噂は事実だったようだ。そして、二つあるドアにもちや

んと理由があるらしい。

「で——その年齢で、どうして探偵が必要なのだ」

男は相変わらず不機嫌そうだったが、不機嫌というよりは呆れているような口調で尋ねた。

「探偵が必要な年齢には見えませんか？」

「見えない。俺の知る限りでは恐らく最年少だな。おめでとう」

何だか馬鹿にされた気がする。

「で？ 用件は何だ」

「えっと——あなたにお話しすればいいんですか？」

「他に誰に話す気だ」

そう言って男は再び眉を顰めた。まだ会って三十分たっていないというのに、僕はこの表情を何度見ただろう。これが標準なのかもしれない。

態度からして——この男は、《診療所の人間》ではなく《探偵事務所の人間》なのだろうか。探偵としての仕事をこなしているのが、この——そういえば名前を聞いていない。

「とりあえず、名前をお伺いしても——」

「駄目だ」

即答である。

「いや、でもどう呼べば？」

「好きなように呼べ」

好きなように呼べと言われても、どう呼べばいいのか。僕の頭に浮かぶのは、山田さんとか田中さんとか佐藤さんとか、ごく一般的な苗字である。

偽名と言われてまず浮かぶのが、田中太郎である。

「じゃあ、その——田中さんでいいですか？」

そう言う男——僕命名、田中さんは今まで以上に不機嫌になった。

不機嫌というより、何だろうコレは。もの凄く怖い顔である。顔が整っている分、普通の人間が凄むより恐ろしいのだ。

「田中——だと？」

気に入らないのだろうか。

「す、すみません、僕ネーミングセンスが全くないみたいなんです！」

我ながらかなり情けない謝罪の言葉である。

でも実際、僕にネーミングセンスがないのが田中さん（と呼んでもいいのだろうか）の激怒の理由だと思う。ならばこう謝るしかないだろう。

「いや、そういう問題じゃなくてだな……。まあいい。気にするな。田中でいい」

そう言って困ったように笑ってから、田中さん（と呼んでもいいらしい）は僕に長椅子に座るよう促した。実は優しい人のようである。

「で？そろそろ本題に入りたいんだが。ここに、何の依頼をしに来たのだ」

「その、ですね——」

僕はわざとらしく咳払いをして、ようやく本題に入ろうとした。ちょうどその時だった。

奥のドアが開いた。

「有り難うございました」

出てきたのは、背の高い綺麗な女の人だった。

肩まで伸びた髪。白い肌。困ったように眉尻を下げた表情。

何と言うか——失礼だが——幽霊のような人である。

怖いとかそういう意味ではなくて、儚い感じのする人だ。

女の人は僕の視線に気付いて、にこりと笑って頭を下げた。

見覚えのある笑顔だった。

「今の、は——」

「貴様の前に来ていた依頼人だ」

田中さんは女の人を睨むように見つめていたが、女の人が出ていったので視線を僕に移した。

「名前は」

名前？と田中さんは眉を顰めた。

「何だ、惚れたのか」

「そ、そんなんじゃないですけど、ただ、どこかで会ったことがあるような気がして」

既視感、と言うのだろうか。

いや違う。僕は確かに彼女に会ったことがある。

田中さんは面白そうに笑いながら、

「探偵業と言うのは守秘義務があるのだが――あの男にそれがあるとは思えんしな。探偵本人に訊くがいい」

と奥に続く開けっ放しのドアを指した。

「え？探偵って」

あなたじゃないんですか？と訊くと、何故俺がそんなくだらしないことをせねばならんだ、と本日何度目かわからない不機嫌な顔を見せた。

「じゃああなたは何なんです」

「良く言えば居候、悪く言えば――やっぱり居候だな」

そう言って田中さんは不敵な笑みを浮かべた。

「あの奥にいるのが、医者兼探偵の究極の変人――折原暦だ」
おりはらこよみ

奥の部屋から、どうぞおと言う声が聞こえた。

巻

診察室の中も、矢張り真っ白だった。

壁、ベッド、機材。何もかもが白い。

白い部屋で、僕と医者——この場合は探偵と呼ぶべきだろうか——は向き合う形で座っている。

「さて——見た感じは健康そうですが。病気じゃなくて、怪我ですか？ 学生さんは部活とかあるから、病気よりも怪我のほうが多いんですよ」

穏やかに、しかしまくし立てるように医者は言った。

見た目はどこか不健康そうである。目が隠れる程度の前髪、白い肌、おまけにどちらかというと細身で、何か持病でもあるのかと心配してしまう。しかし目は生き生きとしていて、そのギャップがどこことなく不思議な感じの人だ。

そして例の田中さんに負けず劣らずの美形である。田中さんは日本人らしくない格好良さだが、この人は爽やか好青年といった感じの格好良さである。これだけ美形なら高校生とかおぼさんの間で有名になっても良さそうだが、どうも人の出入りは少なそうだ。

胸の名札には折原と書いてある。田中さんの言っていた医者兼探偵——究極の変人——は、この人で間違いないようだ。とてもそうは見えないが。

「でも骨折もしていないようですしねえ。歩き方も普通でしたし。もしかして精神的なものですか」

カウンセラーの資格は持っていないんだけどなあ、と折原さんは困ったように笑った。大人っぽい笑顔だ。

「ええと、違うんです。実は、探偵事務所の方に——」

僕がそう言うと、探偵事務所のドアは左側なんですが——と田中さんと同じ反応——尤も田中さんのように眉を顰めはしなかったが

——を見せた。

「左と右とで、何か違うんですか」

音がね、違うんですよ——折原さんは言った。

「音？」

「入ったとき、カランと鳴ったでしょう。右側のドアから入ると鳴りません。あれで患者さんと依頼人を区別してるんです。一応僕の本業は医者ですからね、患者さん優先です」

そう言って折原さんは笑った。

白衣のせいかな、探偵よりも医者の似合う人である。

それで——折原さんは僕に問いかけた。

「今日はどんな御用です？」

僕は問いかけに対して問いかけで答えた。

「あの——幽霊って、いると思いますか？」

「いますよ」

即答だった。

「え？あ、いるんですか？」

僕はいると思いますけどねえ、見たことはないけれど——笑いながら答える。

正直言って、僕は医者という職業に就く人たちは科学の塊だというイメージがあった。

だからてっきり、そんな非科学的なモノいるわけないと怪訝な顔をされると思ったのだ。

僕がそう言うのと折原さんは、

「いえ別に、非科学的なものは信じてませんよ？医者という職業は科学の上に成り立ってますから」

と言った。

「でも、幽霊だってその、科学的じゃありませんよね？」

「そんなことはないですよ」

そう言った折原さんは矢張り笑っている。先程よりも楽しそうだ。「そもそもね、この世界に非科学的なものなんか一つもないんです。人類はまだ進化の途中ですからね。今の科学じゃ説明できないからって、数百年後の科学で証明できないとは限らない」

「はあ、そんなもんでしょうか」

「だってそんな非科学的なものだったら、この世にあるはずないでしょう。この世にないのなら、現代まで残ってるっていうのはおかしい。霊能力者やらも絶滅していませんしね。だったら今の科学じゃ説明できないだけで、死人が再び現れるというのはちゃんとした現象なのかもしれないでしょう。幽霊だけじゃない。現在まで語り継がれていることは、個人の見た幻だとか幻聴だとか、そう言うのでは簡単には片付けられないんですよ。だから僕は幽霊だけじゃない、世の中で起こると言われていることは大抵信じちゃってるわけです」

何となくわかる気もする。

「でも——死人が生き返るなんて、難しいんじゃないですか。心臓も脳も、一度止まったら後は腐っていくでしょう。まあ心臓は奇的に再起能することもあるみたいですけど、そういう人は奇跡の生還とか言って幽霊なんて呼ばれないし。心肺停止イコール死亡。それは今の科学でわかってことです。それを覆すのは無理じゃないですか。死人が生き返るなんてことは、時間が戻りでもない限り有り得ないですよ」

そんなことはないですよ——折原さんは目を細めた。

「僕は先程科学で証明するなんて言いましたけどね、そもそも『科学』という存在だって証明なんかできないんです。事実と真実はイコールじゃない。科学は事実であって、真実ではない。だから——医者が言うのも変ですけどね、科学と言うのは、世の中の『不思議』をわかったような気になるための一つの記号なんです」

「はあ」

僕は間拔けな声を出した。

「事実と言うのは永続的なものではありません。その瞬間だけの結果を事実と呼ぶのです。だから覆されることもある。我々が常識だと思っている事実は、実は大した根拠もないんですよ。例えば――」
折原さんは腕を組んだ。

上目遣いで天井を見る。何かを考えているようだ。

「――例えば、《死んだ人間は生きている》のかもしれない」
「へ？」

そんな矛盾したことがあるものか。

思わず間抜け面になった僕には目もくれず、折原さんは考え続けている。

「だとしたら――そうだな、《認識しないことが必要》なのかな」
ますますわからない。

少しの間折原さんは考え込んでいたが、ああすいません話が脱線しました、と無理矢理話を元に戻した。

「で――今回の依頼は、幽霊がらみなんですか」

「ええ、まあ。僕がそう思ってるだけですけど、多分凄く典型的な心霊現象です」

典型的な心霊現象と言うのもなんだろう。まるで心霊現象が日常茶飯事のような言い方である。

そんなことを考えながら、僕は依頼の内容を呐々と語り始めた。

その心霊現象が起こり始めたのは、二週間前の土曜日のことである。

毎週土曜日は午前二時から一時間ほど見たいテレビがあるので、僕は三時頃まで起きている。そんなものの録画すれば良いだろうという話だけど、正直面倒くさい。起きていた方が楽なのだ。

その日もいつも通り、一人でテレビを見ていた。時々夜中にも拘らず笑い声を上げることもあったけれど、僕は一階の一番右端の部屋で、隣も上も、と言うか僕以外誰も住んでいないからあまり気にしていなかった。

番組が終わるまではいつも通りだった。

一時間して、ちょうど番組が終わったところである。さあ寝るか、とテレビを消した時、音が聞こえた。

音、と言うよりは呻き声と言った方がいいかもしれない。

うう、と男の人のくぐもった声だ。どうも隣から聞こえているようだった。

意外と現実主義者な僕は、最初は泥棒かと思った。

そこで大家さんに電話して、その後隣の部屋の前で泥棒が逃げないようじっと待っていた。声が聞こえなくなってから暫く突っ立っていた。

十分ほどして大家さんが走って来た。どこに家があるのかは知らないが、意外と近いようである。

大家さんはじゃらじゃらとした鍵束を取り出し、鍵を差し込んだ。僕は確認しなかったのだけれど、ちゃんと鍵は掛かっていたようである。

僕らは顔を見合わせてから、恐る恐るドアを開けた。

中には誰もいなかった。

よく考えたら、空き部屋なのである。何か盗ろうと思っても、電球くらいしか取れないのだ。空き部屋だとわかって長居する泥棒なんていないだろう。

そもそも泥棒が盗みに入った部屋で呻き声をあげるというのも不自然である。

つまり、あの呻き声の正体は泥棒——人間ではなかったわけである。

大家さんは本当に聞いたんですか、と僕を疑った。僕は思わず、すいません、自信ないですと謝った。それを聞いた大家さんは、きつと風の音か何かでしょう、と笑った。その言葉に大いに納得した僕は、謝りながら大家さんと別れた。

でも——

家に戻ってから、矢張り風ではなかったような気がしてきた。

聞き間違い、ではないと思う。くぐもってはいたものの、はつきりと聞こえたのだ。

それに、正直な話、入居したときからなんだか《いる》ような気はしていたのだ。

部屋の中に僕以外の誰かが《いる》ような――そう、ちょうどこの診療所に来た時のような――気持ち悪い違和感。

僕は幽霊というやつに会ったことはないが、心霊スポットなんかに行くとしょっちゅう気持ち悪くなる。どうもそういう空気に敏感らしい。その時と同じような感じだった。

それでも気のせいかもしれないと思い、大家さんには悪いことしたなあなんて考えながら眠った。

それから一週間、呻き声が聞こえることはなかった。

しかし、先週の土曜日。

再び聞こえたのだ。

僕は大家さんと呼ぶか迷った。迷った挙げ句、電話した。

大家さんは前よりも早く来てくれた。困ったような顔だった。

矢張り部屋の中には誰もいなかった。

僕は呆れられる前に、本当にすいません、と謝った。

しかし大家さんは呆れるどころか顔をしかめ、実はね、と小声で言った。

――先週、ここから帰ってから思い出したんですけどね？三ヶ月前にも、不気味な声が聞こえたって出てった人がいるんですよ。

その人は隣の部屋に住んでいたらしい。男二人組だったそうだ。

そして、もう一つ教えてくれた。

――儂ンとこの婆さんが言ってたんだけど。

――七年前に、隣の部屋で人が消えてるんですよ。

そこまで聞いて、折原さんはなるほど――と眉を顰めた。

「どうでしょう。こういうのってやっぱり、心霊現象なんですか」

「そうですねえ。貴方は——ええと」

「高野です」

「高野さん。高野さんは、幽霊とか信じているんですか」

「いえ、どちらかと言えば信じてませんけど、何て言うんですかね。心霊スポットとかに行くとか気持ち悪くなっちゃう方です。思い込みなんですよけれども」

そうですか、と呟いて折原さんは黙ってしまった。

暫しの沈黙。

どうも折原さんは何かを考え込んでいるようだ。話しかけ難い。

何だか気まずいので、僕も考え込むことにした。

心霊現象——なのだろうか、矢張り。

誰もいないのに声が聞こえるというのは、世間一般の常識に照らし合わせてもおかしいことだろう。他の部屋から聞こえているわけではないだろうし、もしそうだとしても今現在このアパートに住んでいるのは僕だけの筈だから、矢張りおかしいことなのだ。

それに——もし心霊現象ではないのなら、誰かの嫌がらせということになる。でも、それは有り得ないだろう。

部屋には鍵が掛かっている。まあ本物の泥棒ならピッキングなんて簡単にやってのけるのだろうが、その後——僕らが入った時には消えていなければならぬのである。余程有名な奇術師でもなければ、そんなことはできないだろう。

そもそも隣は空き部屋である。入ったって盗るものもない。いったい何のためにどんな人が入るというのか。僕に恨みを抱いている人——心当たりは全くないが——が嫌がらせをしているのだとしても、何故隣に忍び込んで毎週壁にくっついて呻き声を上げるなどという馬鹿馬鹿しいことをしなければいけないのか。

わからない。

そこまで考えたところで、高野さん——と漸く折原さんが口を開いた。

「その、一回目に呻き声を聞いたときですな」

「何か不審な点でも？」

不審と言えば不審なんですがねえ——折原さんは頬を擦る。

「その時大家さんに掛けた電話の内容って覚えてます？」

「え？ ええ、確か——」

何だか隣に泥棒が居るみたいなんです。

——泥棒？ 隣って空き部屋でしょう？ それに鍵は掛かってる筈なんですが。

そうなんですけど——

——とりあえず、今から行きますから。

「——だけですネ」

「だけですか。じゃあ大家さんと部屋を確認した後の会話は？」

「部屋を確認した後——ですか？」

——本当に聞いたんですか？

いや、その——すいません、自信ないです。聞き間違いかもしれないません。

——この建物はいろんなところを風が通りますからね。それと聞き間違えたんじゃない？

ああ、そうかもしれません。いや、わざわざ来ていただいたのにごめんなさい。

——別に良いですよ。大家ですからね、これくらいのことはしなくちやあ。

本当にすいません。ありがとうございました。

——いえいえ、じゃあお休みなさい。

「——だったかな」

なる程——再び折原さんは眉を顰める。

何かが納得行かないようだ。

「もう一つだけ。隣の部屋は、入口側に窓ってあります？」

「ありますよ。大きな窓が。どの部屋にも一つ、玄関の横に大きな窓があるんです」

「そうですか」

「あの——何かおかしいですか？」

ううん、と折原さんは首を捻る。

そしてポツリと呟いた。

「どうして大家さんは——本当に聞いたのか？なんて尋ねたんでしよう」

「え？」

折原さんは真直ぐに僕を見た。

矢張り生き生きした目だ。

「だって、大家さんが駆けつけた時貴方は外に居たのでしょうか。だったら先ずは窓から何か見えたのかと、そう思いませんか」

「それはそうですね。でも——泥棒と言えば物音でしょう？ゴソゴソとか。そう思ったんじゃないですか」

「でも、ゴソゴソとかそう言う泥棒が立てるような物音を、風の音と勘違いしますかねえ？」

「それは——」

しない——かもしれない。

「風の音と勘違いするのは——どんな音でしょう」

折原さんは僕をチラリと見た。

「どんな——音ですかね」

「そうだなあ、口笛、薬罐、釜の湯が沸く音は茶の湯用語で松風なんていいですし、それから——」

そこで区切り、折原さんは唇の端をつり上げた。

「呻き声——とかね」

「そ、そんな！それじゃあ——」

それじゃあ、大家さんは——

「——大家さんは、呻き声のことを知っていたということになるじ

やないですか!」

「知っていたんでしょう」

折原さんはさりと云ってのけた。

「だって、三ヶ月前に出て行った人が居るんですから。その102号室から呻き声が聞こえると言うことは知っていた筈です」

「そ、そうですね。じゃあ、別におかしくも何とも――」

――ん?

――今の折原さんの発言は、何かがおかしかった。

「おかしいですよ」

折原さんは笑った。

「よく考えてくださいよ、高野さん。その話は帰ってから思い出したと、大家さん本人が言ったのでしょうか? つまり貴方が一回目の呻き声を聞いた時点では、大家さんは呻き声が聞こえるということを忘れていたんです」

「あ――そうか。じゃあやっぱりおかしいじゃないですか。何で大家さんは、隣の部屋から声が聞こえることを――」

――あれ?

「――お、折原さん?」

「はい?」

「僕は、隣が102号室だとお話しましたか?」

「されてませんねえ」

――そうだ、おかしいと感じたのは、折原さんが隣の部屋の番号を知っていたからだ。

「どうして知ってるんです?」

「もっと知ってますよ。そのアパートの名前は『藤花荘』。戦後すぐに建てられたためかなり古く、一階の畳の下は地面で冬場はよく冷える。そして貴方の住んでいるアパートは一階101号室、隣の部屋は102号室――大体あってるでしょう」

大正解である。

「何で知ってるんですか?僕は此処に連絡も無しに来たわけだから、

事前調査も何もしてないでしょう？なのに、何で——まさか超能力、
つてわけでもないですよね」

ふふ、と折原さんは笑った。

悪戯が成功した子供のような、楽しそうな笑みである。

「そうだと良いんですがね——僕にそんな力はありません」

「じゃあ、何で？」

聞いたんですよ——折原さんは種明かしをした。

「先程、貴方の前にいらしてた女性に。その女性が、そのアパート
に住んでいたんです」

「そ——そうなんですか」

女性とは、僕が田中さんと話しているときに見た、あの——どこ
かで見た気のする女性のことだろう。

「その人、名前は何て言うんです？」

「名前ですか？ううん、言っているのかなあ」

守秘義務というものがありますし、と折原さんは腕を組んだ。

「でもまあ、名前くらいはいいかな。佐藤さんです。佐藤都子^{さとうみやこ}さん」

「佐藤都子——さん」

矢張りどこかで聞いたような名だ。何処で聞いたのだったか。

「彼女は——何の依頼をしに来たんです」

やけに知りたがりますねえ、と折原さんは驚いたような表情を見
せてから、ううん、と考えた。

「まあ、貴方の依頼と無関係というわけでもなさそうですし——」

他言無用ですよ、と折原さんは人差し指を唇に当てた。

「彼女はね、貴方のアパートで七年前に失踪した男の、恋人なんで
すよ」

「恋人——ですか」

違う。

《その彼女》を知っているわけではない。

もっと違う、別の《彼女》を僕は知っている。

「今日いらしたのはね、その七年前に失踪した男を捜してほしいと、

そういうわけで」

「探す？ 七年経った今更ですか？」

「七年経った——正確には七年経ってから、ですよ」

「はあ」

どういう意味だろう。わからない。

僕の思考を読み取ったのか、折原さんが説明してくれた。

「民法第三十条に『失踪宣告』というものがありまして。これは行方不明者が七年間見つからないときに失踪の宣言が出来ると言うものです。そして民法第三十一条は『失踪宣告の効力』と言うんですが、前条の期間満了——つまり七年経ったときに、その行方不明者を死亡とみなすっていう法律があるんですよ」

「つまり行方不明者は、七年経てば死亡にすることができると？」

「そうです。で、彼女——佐藤さんは、失踪宣告をする気なんですよ。七年連絡が取れないから、きつと死んでいるだろう。だったらせめて葬式をしたい。だから死んだことにする——とそういうわけですよ」

「成る程——それでどうして、この診りよ——じゃなくて事務所に来たんですか」

診療所も探偵事務所も一緒ですよ、と折原さんは笑った。

「あと一ヶ月でちょうど七年なんだそうです。だからそれまでに、捜すだけ捜して見てくれないかと。もし生きていたなら嬉しいし、死んでいたとしても、死体のない葬式よりはマシだから——だそうです」

そんな——ものなのだろうか。

おや、また話が脱線した——折原さんは話を戻す。

「で、大家さんの話ですよ。怪しいですね」

「つまり、あの呻き声は大家さんの仕業だと言うことですか？」

そうとは限りません、と折原さんはやんわりと否定する。

「大家さんは呻き声のことを初めから知っていたのだけれど、わけあって貴方に話せなかった。しかし二回目のときは状況が変わって、

貴方に打ち明けた——というのも有り得る」

「どちらにしても——大家さんは何かを隠してるってことですか」
「そうですねえ」

何かを隠している——。

僕は何だかわけのわからない不安を覚えた。

あのアパートには、僕の知らない何かがあるのだ。

何か——そう、何かは起きている。

失踪事件。

三ヶ月前の呻き声。

僕の部屋に居る何か。

そして土曜日に聴こえる呻き声——。

それらは繋がっているのか。

そう考えると何だか怖い。

今あのアパートに住んでいるのは僕だけなのだ。

何が起ころうと、僕以外知ることとはできないのだ。

さて——折原さんは立ち上がった。

「行きましょうか」

「い、行くなって——何処へです？」

「何処へって——大家さんのところですよ」

折原さんは何を聞くんだ、という顔で僕を見た。

「行ってどうするんです」

「話を聞くんです」

「何の話を」

「勿論、七年前のことです」

「な、七年前のことは僕の依頼と関係あるでしょうか」

「さあ——」

それは後々わかるでしょう、と折原さんは笑った。

今更だが――

何だかよくわからない人である。

探偵、折原暦。

とりあえず僕は、彼についていくことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7400b/>

僕と探偵と呻き声

2010年10月10日17時08分発行